



VIAGGIO IN ITALY



大森愛子のイタリア紀行
AIKO OMORI PRESENTI

ソムリエ。ワインスクール講師。
世界15カ国以上を旅したのち、何だか面白そうなイタリアに移住。
現在、定職・定住地なし。強運のみを頼りに移動生活を続ける。
旅の最大の目的は、それぞれの国の人人が何を大切にしているのか
を知ること。

2016 30 9.19

琥珀虫

このまま忘れてしまう前に、オルヴィエートの話をしよう。

過ぎ去った日々は緩やかに記憶のかたまりに埋もれて忘れてしまうか、頭の中で事実とは違った美しい思い出として勝手に書き換えられてしまうか。だからまだ少しでも覚えているうちに、ある小さな出会いを思い出しておかなければ。



オレウ"イエートにご"興味が"あれば、
イタリア紀行 23 回目の内容もせ"ひご"見ください。

そんなわけで、今回は回想にふけります

城壁に囲まれた町オルヴィエートはウンブリア州に位置し、ローマから列車で1時間と言うアクセスの良さ。中世の面影を色濃く残す石造りの町並みは、さながら何世紀も前にタイムスリップしたかのよう。鳩や猪料理など郷土料理も興味深く、休日にはよく訪れる町のひとつです。

ある日いつものレストランで食事をしたあと、帰りのケーブルカーに乗り遅れないよう駅まで歩いている途中、街角のお土産物屋さんに気を取られました。とりたてて魅力があるわけでもないその店の前で足を止めたのは、店先に色付いた野菜や果物が並んでいたからです。美味しそうとか珍しいとか思ったわけではありません。まるで100年前から同じ一日を繰り返し続けているような古ぼけた店の佇まいは、掘り出したタイムカプセルみたいなこの町にはよく似合っていて、店の商品といえば、見飽きた絵柄のポストカード、置く場所に困るほど澄んだ目をした木製の人形、もはや売っているのか飾っているのか判別のつかない、埃を被ったキー・ホルダー。そうした時の止まった静けさの中で、あと数日の命であろうしなびた野菜や果物の生命感がいやに生々しく異質なものとして写ったのです。

店の前で立ち止まっていると、店主だと思われる男性が店内から出てくる気配が。“Buon giorno.”と店主。あら…、不意をつかれたのは、その男性が思ったよりもずっと若く、当時の私と同じ、20代後半だったからでしょうか。おじいさんのお店の店番でもしているのかと思わせるような、野菜と同じくその店の中では若さが妙に生々しく際立って見えました。

探るように私の顔を見たあと、“Japonese? (日本人?)”と店主の質問。お、珍しいな。自然と顔がほころびます。というのも、東アジア系人種の顔の違いを見分けられるイタリア人はほとんどおらず、アジア系は大抵 Chinese (中国人) と思われているから。私は別に日本人に生まれてよかったとも悪かったとも思っておらず、そして特別中国人が嫌いというわけでもないのですが、日本人としてのアイデンティティーは持って育っているので、国外に出るとどうしても遠く離れた祖国が美しく誇るべき場所に思えてしまうのです。そんなときに四方八方から中国人、中国人と呼ばれていると、ほとほとんざりてきて、何度 “Non sono chinesi. Sono giapponese. (中国人じゃないって。日本人だよ。)” と大声で返したことか。他人の国籍を間違えることがどれだけ相手を傷つけるか、これはプライドの問題です。

「はい、日本人です。」笑って答えると、彼の表情も明るくなりました。「やっぱり! ねえ、見てほしいものがあるんだ。」そう言って私を店内に誘導します。うれしそうに指差した先には、壁に貼ってある日本語の雑誌の小さな切り抜き。よく見ると写真に写っているのは正しく目の前にいる彼。町の土産物店として紹介されています。「日本語だから、なんて書いてあるのか僕にはわからないんだけどね。」「ええっと、伝統のある、素敵なお店だって書いてある。」「そうか、ねえ、この切り抜き、写真に撮ったら?」「えっ? あ、そうね。そうする。」「それで、次は僕と君と一緒に写真を撮る。それでその写真を君の日本の友達に見せるんだよ。いい考えだと思わない?」「うん、すごく。」そうして何枚か写真を撮ったあとに、「絶対に友達に見せてね、それでこの店のことを誰かに伝えて欲しいんだ。」そう言って念を押す彼を多少しつこいなと思いつつ、その口調に何だか切実なもの感じて、私はたじろいでいました。「実はね、今ローマに住んでいるの。だから友達にこの写真を見せるのは、少し先になりそうだわ。ごめんなさい。」首を振る彼。「いや、いいんだ。全然…。そうか、ローマに住んでるのか。ローマはいいところでしょう?」「多分ね。」「色んな町にアクセスできるし、仕事も色々あるんだろうな。きっと毎日楽しいんだろうね。」「どうだろう、私にとっては良いところと悪いところがあるわ、もちろん。」「そうなの?」「泥棒やスリは多いし、汚いし、ご飯は高いのにマズいし。そういう意味ではオルヴィエートの方がよっぽどいいんじゃない? 静かで美しい街並み、おいしいご飯、親切な人々!」

多少のリップサービスは入っているものの、概ね本音だ。「そう、本当に美しい町だよ。だけどね、」彼が口を開く。表情からそのあとに何を言うのかは想像できた。言ってほしくなかったが。

「時々すごく退屈になる。」そう、その通り。私の本音はその通りである。店の中から出てくる彼を見て最初に思ったのは、若いのにこの町で暮らしていて退屈じゃないのかなってこと。だけど私はこの町を、自分の気分転換のため訪れる、時の止まったこの町を、どうしても良いイメージで持って帰りたかったから、そんなこと言って欲しくなかつたのだ。自分で住むには地獄だと思ってるくせに。かように外野はいつも無責任で自分勝手である。

「だけど僕はこの店を守らなくちゃいけないから。」彼が続ける。「もう何代もやっている店だしね。」どうも話の流れ上私がフォローを入れる側になっている。「素晴らしいことだと思います。」「ありがとう。この町で生まれてこの町で育っているからね。」言葉とは裏腹に彼の表情の隅々からは不服そうな様子が滲み出ている。退屈、退屈、退屈、日本人でローマに住んでいて、それでまた違う国に行くんだって？死ぬまでこの町にいるってことがどういうことか、ねえ分かる？

視線を逸らす。私はいい加減うんざりしてきた。あのさそんなに退屈ならローマに住めば？ここから電車でたった1時間の町よ！だけどその言葉を飲み込んだ。なんせ私は3ヶ月ごとに店の色が変わり、服や食べ物、思想にまで流行のある日本に住み慣れているのだ。私にとって生きることは動くこと。治安が悪かろうが食べ物が不味かろうが、少なくとも時間が流れている町を選ぶ。あんな風に言ってるけど、きっと彼は彼なりに世界を愛しているんだ、私は違うやり方で。そう思って、時の流れの中で彼と話したことなんてすぐに記憶の山に埋もれた、いつものように。

…そしてこれが、彼に関して思いだせる全てである。たいした出会いではない。わざわざ引っ張り出してきたわりに感動的な記憶でもない。

だけど私は今、日本に帰ってきて、観光客でごった返す忙しい町で、静かに彼のことを思い出しているのである。ああそうだ、あの人は元気かなって。



古い町の骨董品店

ねえ、あなたの写真を友達に見せるって約束、あれを果たす気は全然ないけどごめんね。無責任で飽き症の私が、暇つぶしのプロのようなあなたにかけられる言葉なんてあの時は何もなかったの。だけど今、遠く離れた町であなたのことを考えている。確信を持って言えるよ、今日もあの店で退屈そうに外を眺めているんでしょう？もう100年も前から立っているような顔をして。生まれた時から変わらない景色。町の人々の話題は、お天気と、広場の時計の針の動きがちょっぴり遅くなってるってこと…。だけどほんとのこと言うと、どこに行つたって退屈なんだ。だからこそ愛するしかないんだ、自分の町を。世界を。

日本、この町で目に映るのはカラフルな人々の行列、NEW OPENの張り紙が立ち並ぶ店先、よく通っていた道なのに前に何があったのかどうしても思い出せない空っぽの敷地。大切なのは気分だけ、思想も歴史もあてにしない、私の愛する軽薄な町。聞こえてくるのは、歌詞の意味はよくわからないけれど何となく楽しい気分にさせてくれるJ-Pop。私の軽薄さにも磨きがかかっているようだ。

信号で捕まった横断歩道の前で目を閉じる。時間がごうごうと音を立てて流れしていく。瞼の裏でぐにゃぐにゃした色の集まりが気味悪く蠢いていたが、じっと見ていると人の輪郭が形を持って認識できた。彼だ、と思った。立ちすくんでいるのか時の流れに抗っているのか分からない、その姿は生きたまま閉じ込められたという虫の入ったあめ色の琥珀を思わせる。虫は逃げられずに石の中に閉じ込められたのだろうか、それとも石の中で自ら時を止める事を選んだのだろうか。

周りの空気が動く気配がして、慌てて目を開ける。信号が青に変わっている。